

キューピー (3/4)

h 35 cm



h 65 cm



h 65 cm

右上写真のキューピー人形はドイツ生まれのビスク製です。中央と右はセルロイドハウス横浜館1Fの展示品で、日本製のキューピーですが背中刻印がはっきりしませんので作られた年月や製作会社は不明です。

ドイツのキューピー人形はローズ・オニール (Rose O'Neill・1874-1944) のオリジナルを確りと守って作られています。瞳は黒です。日本製キューピーの瞳は茶色(中央)と青みがかった黒(左)です。素材がビスクとセルロイドという相違点がありますが、日本製2体は、ローズ・オニールが描いたキューピーのイメージから離れ過ぎに思われます。

アメリカで「あるとき、ローズ・オニールが偽物の日本製セルロイドのキューピーを見せられて愕然とし憤った」という話が伝えられているそうです。その当時の日本でのキューピー人形の製作は、どのようにして行われていたのでしょうか。

ローズが妹カリスタと共にドイツからアメリカに帰国したのは1918(大正7)年です。その頃の日本の玩具製造業は東京に集中していました。そしてセルロイドが玩具の素材として使われ重要視される時代に入ったところでした。

日本の大正初期までは、セルロイド玩具でも雑貨の加工は家内制手工業で、自分の家庭でロクロや削り器などを備えた程度で、親と子又は弟子を加えても3、4人程度であったと思われます。従って、セルロイド加工業とは、まだ言い難いものでした。

しかしセルロイドが新興資材で、従来の木・竹・紙・泥などでできたものに比べて、はるかに美しく、また軽く、清潔さがあり、その上どんなデザインの人形でもできるから珍重

されて、従来の日本人形を圧倒し、売れ行きが伸長しました。

かくしてセルロイドは新興産業として発展し、農山村の子弟が上京して、セルロイド加工屋に弟子入りし、技術を習得後独立する者が続出しました。

セルロイド頭飾品、櫛、台所用品の輪桶・洗面器・石けん箱・筆入れ、裁縫箱などは、旧来の木製、紙製に代わって飛躍的に生産されました。

玩具は裸人形、カチューシャ、パープー、キューピーをはじめ、塗りこみ人形、各種動物、ガラガラなど、豊富なデザインのもものが、輸出に国内に注文が殺到して、特にセルロイド玩具の黄金時代に向ってスタートしたと言えましょう。



パープー

セルロイド玩具加工が本格的に企業として始まったのは、記録によりますと、第一次世界大戦が勃発した 1914 (大正 3) 年、寺本圭助が東京亀戸にローヤル商会加工場を設立したのが初めてのようです。

大正 5 年 1 月、東京セルロイド同業組合が設立され組合員数 282 名の多きに達しました。同 6 年には 331 名、7 年には 434 名、8 年には 484 名、9 年には実に 630 名に達しました。

630 名のうち玩具販売業者 (問屋) 17 名

玩具加工業者 245 名

我が国の産業がまだ未成熟で、業者の意識も低調な時代に、セルロイド業界の先人が逸早く組合を設立し、検査制度を実施して粗悪品の輸出を防止し、価格の安定を図って、輸出を増進しようとしていました。

しかし大正 8 年、第一次世界大戦が終わるや、同 9 年にかけて大恐慌がやって来ました。セルロイド業界も操業休止、倒産者続出、夜逃げする者など、大混乱と悲惨事が頻発した。玩具加工業者の組合員は、昭和 2 年には 145 名に減少してしまいました。

大正 10 年、組合登録制度が創案され、自己の製品と商標を組合に登録して組合がこれを保護いたしました。ミニ特許庁意匠登録と言えます。これにより模造品を防止し取引を安定させて価格の低下を防ごうとしたのです。(登録後 5 年で公知品)

極度の不況時代は 1923 (大正 12) 年の関東大震災まで続きましたが、震災の復興にも数年を要し、業界復調が見え始めたのは大正 14 年頃でした。

大正時代の産業構造は、生産者より販売業者が強く、生産者は販売業者に隷属していました。製品は、殆ど、販売業者から、こんなものが売れそうだからやってみたらどうか・・・などと指示されるのが普通でした。自分で考案して売り出すところはごく少なく、大部分は販売業者に依存していました。

大正時代は明治時代からの極端な資本主義経済の発展の過渡時でしたし、また、明治以来の封建制度が根強く支配していたためでもありました。販売業者が、所謂お店（おたな）として工場側に君臨し、工場の死命を制していたのです。

しかし、良いものを造っているところ、生産量が多く資金のあるところは、問屋に隷属するのでなく対等に取引をしているところもありました。

1928（昭和 3）年には、東京輸出玩具問屋協会（会長・岩田屋倉持長吉）が東京の有力輸出問屋 6 社によって設立されました。

1924（大正 13）年 8 月、関東大震災の翌年に
「キューピーさん」という童謡が歌われました。

♪♪♪ キューピーさん おおはしゃぎ
ようふく きたり ちゃんちゃん きたり
さんかくぼうし かぶったり



じどうしゃに のったり
すけーとに のったり
たこ あげたり はね ついたり
ほんとうに うれしそうな
きゅーピーさん



作詞は葛原しげる。葛原は、とんび、村祭り、羽衣などの作者。作曲は弘田龍太郎で浜千鳥、しかられて、鯉のぼり、などの作曲者です。



1924（大正 13）年 11 月、林芙美子は自分が体験したキューピーの彩色場のことを「放浪記」に書いています。

（11 月 X 日）ここは、女工が 20 人、男工 15 人の小さなセルロイド工場だ。鉛のように生気のない女工さんの手から、キューピーがおどけていたりして、朝の 7 時から夕方 5 時まで、私達の周囲は、ゆでイカのような色をした蝶々やキューピーでいっぱいだ。

（11 月 X 日）いつまでたっても、セルロイドの臭いにセルロイドの生活だ。朝も晩も、べたべた三原色を塗りたくっている。

（12 月 X 日）二寸ばかりのキューピー一つをごまかして来て二畳の部屋の茶棚の上に載せてみる。私が産んだ キューピーさん。冷や飯に味噌汁をザクザクかけて書き込む寂しい夜食です

2011（平成 21）年 12 月に 88 歳亡くなった作家・豊田正子の原点は、葛飾区本田小学校 5 年の時に書いた「綴り方教室・彩色屋」でした。それは放課後に夜遅くまで同級生 3 人と、葛飾区渋江の大八セルロイド工場でキューピーの色塗り（彩色）をしていた時のことです。

東京葛飾区渋江に千草セルロイド工場が操業されてから葛飾区内には 200 のセルロイド工場とその下請けの内職屋が 2000 軒余りあり、海外輸出品の 90%が葛飾区で生産加工されていました。（東四つ木・町の文化と歴史をひもとく会編・木根川の歴史 2 より）

セルロイド人形の製作に最も重要なのは金型です。大中小、やせ形、太ったもの、種々各様のキューピーの金型は吹込み成型式で、真鍮（銅 70%と亜鉛 30%の casting）で出来ています。

右上の写真はセルロイド人形の金型を作る工程説明表と金型の見本です。葛飾区四つ木の「モールドメーカー株式会社カミジョウ」より寄贈されました。



日本製キューピーの背中には、メーカー各社の商標が刻まれています

ローズ・オニールは黒人の子供に黒いキューピー人形を作ってあげました。HOT TENTSと名付けました。

下の写真は、日本製の黒キューピーの正面と背面の刻印です。首筋の緑 2 枚はキューピーの羽です。しかし、ローズのキューピーの羽は全てグレーです。

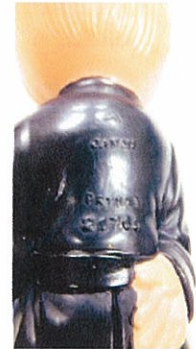




オリエンタル h42



h25、h30、背後に龍マーク



ローヤルのマーク



ローヤル・20



ローヤル 22
h50・背中は百合マーク



左=ビスクh15 右=ゼルロイドh21



オリエンタルのマーク







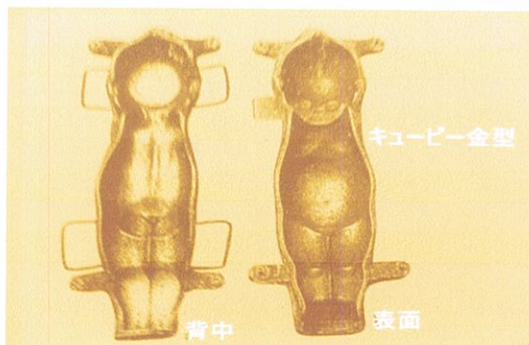

Oriental Celluloid Co., Ltd., Tokyo.
 Royal Company Ltd., Japan, Fleur-de-lis.
 小林大八工場



 Kuramochi, Japan, CK in diamond w/trademark.



h30



右のキューピー（h59 cm）は、セルロイドハウス横浜館に展示中のものです。

上の写真は、右のキューピー製作に使用した金型です。この金型の現物が平成 22 年末まで、東京都葛飾区の「セキグチ・ドールハウス」に展示してありました。

キューピーの背中には、オリエンタルトイ社の商標とデザイン及び Patent No. が刻印されています。



1925（大正 14）年、農商務派遣の第一回旅商団に、セルロイド玩具業界から選ばれて、時の同業組合長の海老原秀吉氏（オリエンタルトイ社の初代社長）が、一員として参加し中南米 12 ヶ国に、一ヶ年に亘ってセルロイド玩具の製品を紹介、宣伝し帰国しました。

それから 1929（昭和 4）年に、寺島町（現・墨田区東向島）に輸出セルロイド玩具研究所が建設され、セルロイド玩具のデザイン、彩色、加工（金型含む）技術を研究し製品も作りました。この所長が海老原秀吉氏でした。海老原氏は学識、経験ともに豊富な人格者で当時の業界リーダーでした。

日本の過酷な労働環境の中で生まれたセルロイド・キューピーが、大正から昭和 12 年にかけて世界各国に輸出され貴重な外貨を稼ぎました。日本は昭和 6 年満州を建国、昭和 12 年中国に侵攻。米英に宣戦布告そして敗戦。戦後はオキュパイド・ジャパńczyューピーも作られましたが米国から輸入禁止を告げられ、玩具業界のセルロイド時代が終わりました。

次稿、キューピー（4/4）はソフビ・キューピー。

参考図書

- 1、東京玩具人形問屋共同組合 70 年史、昭和 31 年刊
- 2、東京セルロイド業界史、(財) 東京プラスチック会館監修発行、昭和 54 年刊
- 3、全国セルロイド名鑑、(財) 日本プラスチック輸出検査協会、昭和 33 年刊
- 4、生産組織の経済史、岡崎哲二編、東京大学出版会